

八月十七日 夜十時俊野進発、可愛岳に向う。
 八月十八日 早曉大西郷とともに可愛岳の重囲を突破して夜に入り、地蔵谷に露営す。
 八月十九日 地蔵谷を發し、上祝子村水流に達す。
 八月二十日 水流を出発して、鹿川山浦峰に達す。
 八月二十一日 山浦出發三田井に達す。
 八月二十二日 三田井を發し、三ヶ所村坂本に達す。
 八月二十三日 坂本を發し、七つ山を經ぎ松の平に達す。
 八月二十四日 松の平を發して、小愛越を經て神門に達す。
 八月二十五日 未明降雨について神門を發し、児湯郡に入り、東米良銀鏡に入る。
 八月二十六日 銀鏡を發して、村所に達し、二十七日さらに肥後槻木を經て再び日向の須木に到る。
 八月二十八日 小林の警察分署を襲い、二十九日未明小林を出發、大隅の言松に宿営。
 八月三十日 吉松を出發、横川を經て牧園に達す。
 九月一日 鹿兒島に入る。増田は残る中津隊員を集めて薩軍の形勢を説き、この際諸君は前途有為の士だから重囲を破り、故山に帰れ、機をえてわが党の心事を天下後世に伝えて欲しいと勧めた。しかもかれらは増田の去就を尋ねた。増田は大西郷に謁して敬慕の情に堪えないものがあるので、あくまで翁と生死をともにすると語り、涙潸然たるものがあつたという。

九月三日 夜半より四日にわたり増田は、監軍北郷高兵衛、福岡の川庄善徳らと寶島清の軍にしたがい、抜刀隊員二〇〇余名とともに米倉を襲撃、増田の率いる中津隊は遂に二十四日の城山陥落をきたす、この時合戦したのであつた。四月一日中津を發してからまもなく一五七〇日であつた。

南九州地方では、今日にいたるまでなほ「先陣ホギ」の名をもつて、中津隊を愛称し、その義心を称揚している。

民俗資料 豊前神楽

豊前神楽とは豊前の各地におこなわれているかぐらの総称で、その数は豊前地内に約二〇社、豊後二社、北海道二社、野約二四社とされている。その舞方は社によって多少の相違はあつても大同少異にすぎない。

その起源は元龜年間（一五七〇頃）中津若狭官の御言植野土佐寺藤原外記が伊勢の神人から伝承した神人によるかぐらを民衆的に改変したもので、実に勇壮活潑、しかも甚だ神秘的であることがその特色であると、『植野文書』豊前神楽の由来には誌している。

豊前神楽の番付は次の通りである。

一、岩戸かぐら 一八番

鈴鹿、一人手房、二人手房、大汐舞、御先、弓証護、地割、以下岩戸かぐら「思兼命、東方鬼、南方鬼、西方鬼、北方鬼、石古種留之命、太玉之命、玉祖之命、長日羽之命、宇須女之命、手刀男之命」。

二、神阪かぐら 三三番

清祓、奉幣、大麻舞、大汐舞、大神、早神、御先、三神、美々久、幣証護、御子神楽、四ツ手、弓証護、地割、掛手房、神迎、鎮座、一人手房、二人手房、引入柴、網御先、以下岩戸かぐら「思兼命、東方鬼、南方鬼、西方鬼、北方鬼、石古理留之命、太玉之命、玉祖之命、長白羽之命、宇須女之命、手力男之命」(七五三校)。

三、湯立かぐら 三三番

奉幣、大麻舞、一人手房、二人手房、大汐舞、御先、掛手房、三神、幣証護、四ツ手、引入柴、神迎、鎮座、弓証護、地割、網口、大蛇退治、以下岩戸かぐら「思兼命、東方鬼、南方鬼、西方鬼、北方鬼、石古理留之命、太玉之命、玉祖之命、長白羽之命、宇須女之命、手力男之命」(湯庭の次方)清祓、神隨、湯之御先、一箇一宮、鎮火祭。

外に火久々利、七五三校を追加することあり。

四、年間かぐら 三三番

清祓、神隨、靈前御先、御盤迎、鎮座、奉幣、大麻舞、一人手房、二人手房、大汐舞、大神、早神、御先、小一郎、三神、美々久、幣証護、宝満、御子神楽、四ツ手、神拵、弓証護、地割、網御先、掛手房、蛇迎、引入柴、白灰文、鉦翁、御神楽、網口、大蛇退治、七五三校。

地鎮の際のかぐら 四番

清祓、奉幣、神隨、地鎮、御先。

かぐらの舞い方

(一) 清祓とは御そぎ校にて祝詞を読んでだけがれを被ふのである。なほ大校詞を三度くりかえし舞う。(正式には大校ののりごとを奏上するが普通は略して述べる)

(二) 奉幣とは奉幣使一人、後見四人にて幣を奉じて舞う。最後に三宮の上に奉幣をおく。

(三) 大麻舞は一名鈴開きともいう。四人立ちにて清祓と祝詞を述べて舞う。

(四) 一人手房とは扇をもちて、四方の神に言儀を読み符と鈴にて舞う。

(五) 二人手房とは大体一人手房を二人にて舞う。

(六) 大汐舞はまた花かぐらともいう。四人立ち幣をもち、四方の神へ言儀を読みつつ花を取りて舞う。

(七) 大神とは四人立ちのかぐらで幣と鈴の手で舞う。

(八) 早神とはちはやを着て毛頭をかむり、大麻舞のように舞う。

(九) 御先とはももともありふれたもので幣差しと鬼神との舞をいう。このかぐらには舞いあげがつきものである。

(一〇) 三神とは山の神、里の神、海の神の立合いの舞である。

(一一) 美々久とは四人出場、紙張りの笠をかむり四方の神に礼拝しつつ舞う。

(一二) 幣証護とは四人立ちのかぐら幣を主として四方の神を拝し舞う。鈴も使う。

(一三) 御子神楽とは二人にて宇須女の面をかむり、テンガンをかむりて順にいで舞う。

(一四) 四ツ手とは四方の悪魔を切払いこれを護る意にて四人にて毛頭をかむり、刀をさし、たすきを掛けて舞う。

- (一五) 弓証護とは刀と弓矢を用いて四方の悪魔を取払いこれを護る意にて、四人にて毛頭をかむり、刀をさし、弓矢をもって舞う。
- (一六) 地割とは兄弟五人の神楽であって、言儀が終れば東西南北の隅々の悪魔を抜い、後東西南北および中央を抜い清める。
- (一七) 掛手房とは二人のかぐらで二の掛け歌を詠むことが他のかぐらと違う。
- (一八) 神迎とは外かぐらで幣差一人、大太刀一人、小太刀一人、なぎなた一人、鬼神は前段と後段に分かつ。
- (一九) 鎮座とは神迎のときの幣差し、そのまま拜殿にいで舞う。
- (二〇) 引入柴とは四人立ちにて玉、幣差、惣社の外布津王の舞、布津王の神は楯に御鏡や五穀に神宝をつけ惣社と言儀をいい、惣社立ち玉よりの返事を布津王に伝えて舞う。
- (二一) 綱御先とは幣差しと鬼神と大蛇の舞を前段とし、後段には幣差と綱どりと三人先に出で、鬼神と大蛇の舞である。

- (二二) 岩戸神楽惣奉之命はのりとを詠み岩戸の古廳に座す。
- (二三) 岩戸神楽東方鬼、南方鬼、西方鬼、北方鬼は順々といで、岩戸を鬼杖を持ちてたたき、環となって舞うところにて、石古理留之命いで太刀を抜いて四鬼を退治し、岩戸に向って言儀をいう。
- (二四) 岩戸神楽の太玉之命とは神をかたげ、引歌にしたがって出場、楯を左右に振り払う舞。
- (二五) 玉祖之命とは幣差しをもって出場、岩戸に向い言儀をいう。

- (二六) 岩戸神楽の長白羽之命とは弓矢をもち引歌にしたがって出場、幣と鈴をもちて舞い、最後に弓矢を思兼之命に渡し舞う。
- (二七) 宇須女之命は幣差しをもち舞い、また扇をとりて岩戸の右にあるいは左に舞い納む。
- (二八) 岩戸神楽の手力男之命は大幣をかたいで出場、言儀をいい、舞いの最中に石古理留之命や太玉之命、長白羽之命、宇須女之命などに行き当り、たすきを掛けて再び言儀をいい、さらに舞い続けて岩戸を開くのであるが、つめ岩戸と称する神楽は少し異なるところがある。
- (二九) 七五三被とはたすきを掛け、毛頭をかむり、太刀二本をもちて早物にて拜殿に出場、どの神楽にもあるよう四方を舞って舞う。

- (三〇) 綱口とは御子神楽と違うところは綱をまねきだして舞うことである。
- (三一) 大蛇退治とは足名権、手名権の両神に楯名田比売が簸の川の上流で悲んでいるところから始まり、遠須佐之男命が十拳剣をもって八俣遠呂智を退治る舞である。

- (三二) 湯立神隨神楽とは三人立ちにて烏帽子をかむり刀を腰にさして舞い、湯柱の許に座し、のりとを詠み、幣をおき左右の切り込み、すなわち天地源明神皇当社会の九字を切るの構えを三度繰り返し、太刀を納めおくまの米、御酒、塩をかわらけに入れ、水を柱のところにかけて舞うのが普通である。

湯前かぐらの言儀

かぐらの言儀は甚だ長いので、こゝにはその概略を誌して参考に供する。

大祝詞 大祝詞は普通神道八部大祓の全部または一部を奏上する。

花神楽 東方木徳元盞之神、南方火徳之盞神、西方金徳元盞神、北方水徳元盞之神に対しそれぞれ女をば花のけっかい参らせるとし奏上する。

一人手房 花かくらの言儀とほほ同じ。

二人手房 御手房を手に取り給い舞むには、四方の神を花とこそ読む。御手房を見上げ見下し舞むには、かつらぎ山の神楽と読む。

地割 古事記の書き直しよろしく、天地開びやくより、おのころ島の発生、さては天神、地神の由来を説き、豊登原の中国をまず三三ヶ国に分ち、さらに六六ヶ国に細分、一國ごとに一の大社を鎮め、ここ天下泰平を奏ぎ、五人は夫々の地辺に対し和歌二首を奏る。

東方木の神、くくぬちの命に申し渡すべきことの候。春三月、九十日の内より十八日をぬき出し、土用となづけ、残る七十二日を守護し御鎮り候へ。

南方火の神、かくづちの命……以下季節を夏とする外東方と同文。

西方金の神、金山彦之命……以下季節を秋とする外東方と同文。

北方水の神、水波三女之命……以下季節を冬とする外東方と同文。

中央、土の神、波仁守姫之命に申し渡すべきことの候、四季、四節を合すればこれも七十二日に候へば、七十二日を守護し御鎮り候へ。

御先、「幣」神を仮りにすがり給りし、すめみまの神の御名こそ天降ります。八重雲を伊豆のちわきにちわき津の、みともつかふる諸やすの神

「御先」出向ふ神は神なり、おもかちて我あらわさぬ、この神の名ぞ。

「幣」あし原の水穂の国にさばえなす、あらふる神のたぐいはらぬお。

「御先」あし原の水穂の国にさばえなす、あらふる神のたぐいはらぬらん。

「幣」日の御子につかえまつりし天津神、名は天の宇須女之神をしらすや。

「御先」日の御子につかえまつりし国津神、名は御先つかふる猿田彦の神を知らずや。

岩戸神楽は天照大神が天の岩戸にお隠れになられてから、再び岩戸を御開きになるまでの間に交へた石古理留之命、太玉之命、長白羽之命、宇須女之命、手力男之命、思兼命の言儀。

山神は、「八尋」西の海、青木が原の汲みより、あらわれ出でし住言の神。

「山神」山深くもみわけ行けど道もなく、いづくにますや山の御神。

「八尋」何神にて候。

「山神」山神にて候。

「八尋」三神の身として神楽場所に行かん。

「山神」まず神を奉らん。

「八尋」神因念なくては如何。

「山神」なかなかいんねん御座候……

天照大御神天の岩戸にこもらせ給へば日本常闇となれり、其時銘々の神達集り給いて、御しゆうそうあれども御出現なく、此処にゆうとうと申す神宣く、大山住之命のさわきに神三本あり、一また申受け、岩戸の御前に飾り奉り、拾式の掛歌を唱い、八百萬の御神楽を奏し奉れば、岩戸も開け、日本明になり給ふこと、此の神の威徳にて候、まつた神と申奉るは神代にては曲玉の木という。神霊にては中継木という。人皇にては神という。まずまず神を奉らん。

大蛇退治には須佐男之神と足名稚の對話が言儀となっている。

神楽の舞方

神楽を舞うときの共通点は力足を踏むことによって調子をとる、またかぐらばやしと調子を合せること、また鈴を振り幣を振ることによってもはやしと調子を合せる。舞には必ず天地四方の神々を拜することがついている。

神楽ばやし

豊前かぐらの奏器は大太鼓、横笛、チャンガラである。横笛は二人で吹く場合もあるが大太鼓とチャンガラは普通一人である。



中津公園（中津城下壇の広場）

第四節 公園

一 中津公園

中津公園は市内二ノ丁にあり、旧中津城の敷地の下段一部である。

天正五年（一五八七）黒田孝高が、豊巨秀吉から九州平定の功により、東豊前六郡の地を賜り、ここに中津城を築いて以来、細川、小笠原、奥平と四度その藩主をかえたのであるが、都度その居城となり、中津藩政の中心として明治四年廃藩置県にいたるまで、殊に奥平は徳川の親藩として城下街とともに繁栄を極めたのであった。

天主閣は細川忠興が小倉城を構築するにあたり、一國一城のおきてにしたがってこれを毀ち、その他の城廓は大部分のものが廃藩置県に際し取除かれ、最後に残った松の御殿も西南の役に当り炎上した。

昭和四十年五月一日印刷
昭和四十年五月三十一日発行

非売品

編集者 大分県中津市役所内
発行所 中津市史刊行会

大分市上野七番二十五号

印刷所 三恵印刷株式会社